

あるものどもの原理としてのあらぬもの

—『メタフシカ』N巻1-2章の哲学史的遡行—

西岡 千尋

はじめに

アリストテレスはプラトンの「イデア」を哲学史の一部として語りえた。このことは、イデアに関する議論を対話篇の文脈から切り離し、特定の論点において諸学説の横に並べうること、さらにその成立を縦断的に、何らかの問題の必然的な展開として考察できるようになったことを意味する。対話篇を読むことと同じとも異なるとも言いきれない、新しいプラトン受容の始まりである。むろんそこには光と陰があるが、本稿の課題はこの変動の功罪や誘因を論じることではない。テキスト内部に刻まれた縦横の震動を受け止めながら、プラトン哲学を再現し、自らの間に接続したアリストテレスの足跡を辿ることである。

その再現の最も著名な例に『メタフシカ(形而上学)』A巻の哲学史がある。A巻6章では、ヘラクレイトス主義やソクラテスの影響に触れながら、とりわけイデアの分有説と数的要素をピュタゴラス派の哲学と関連づける¹。これがアリストテレスの「公式見解」ならば——そう受容されてきた側面は否定できない——違和感の一つとして、パルメニデスの言及がない点が挙げられる²。プラトン中・後期の対話篇においては、パルメニデスの顕著な影響が認められるからである³。この描き方の真意を捉えるためには、もちろんA巻を精読せねばならない。だがそれとは別に、この哲学的系譜をめぐるアリストテレスの理解を補足し、A巻の記事を相対化しうるような、ほかの根拠も求めるべきである。

『メタフシカ』におけるパルメニデスへの言及のうち、プラトン哲学と直接関係する箇所が一つだけある⁴。同時代人の数学的な原理論を論駁する、N巻2章(1089a3-4)である。しかしそこで語られるのは、パルメニデスもイデアの構想に影響を与えた(影響の一部である)という単純な話でない。不動な原理としてのイデアより、不動なイデアや数学的なものの原理が論じられている。また継承や借用といった素直な影響ではなく、ちょうどプラトンが『ソフィスト』で試みた

ような、パルメニデスへの挑戦が念頭に置かれている。こうした複雑さに加えて厄介なのは、『ソフィスト』が批判的な仕方でも引用され、多くの研究者がこの再現の正当性を疑っている点である。アリストテレスは何ゆえにパルメニデス—プラトン間の系譜を語ったのか、それは一体何を解明するのか、引用はなぜ不適切に見えるのか、書き手の真の関心はどこに向けられているのか。これらの連鎖する問いに対して、本稿はN巻の文脈に定位して、一貫した読み方を提示する。結論からいえば、アリストテレスは「あるとあらぬ」のアポリアと「一と多」のアポリアの位置づけを逆転させている。それは『ソフィスト』篇の端正な読解というよりも、あるものどもの原理としてのあらぬものがどこから来て、どこに向かうのかという、哲学的問題の展開を見通す野心的な試みとして評価できる。

1. 従来のアプローチと当該箇所文脈

N巻2章における『ソフィスト』への批判的言及は、概して否定的に受け止められてきた。古註ではシュリアノスのあふれんばかりの叙事詩的慨嘆に始まり⁵、註解者たちや Cherniss, Aubenque, Mueller の論評⁶を挙げることができる。詳しくは後述するが、対話篇に忠実とは言いがたい要素が見られるのは確かである。ある穏健な解釈者たちは、言及が『ソフィスト』の引用であることに留保を付けたり、批判対象が特定できないと注記したりして、本箇所の論争的なニュアンスを減じようと努めている⁷。だがこのような抵抗は、本文を素直に読むかぎり無理だろう。いくら問題含みであるとしても、すぐに『ソフィスト』と分かる仕方と言及され、そこでプラトンの「あらぬもの」(μη ὄν) が槍玉にあげられているということは、動かしがたいと思われる⁸。ただし字面としては『ソフィスト』を表に出しつつ、ほかの著作を併せて考慮していた可能性は十分に考えられる⁹。

近年ではこれらの前提を正面から受け止めたうえで、これまでの評価に一石を投じる成果も出てきている。Narcy は「あらぬもの」をめぐるプラトンとアリストテレスの食い違いの背景には、戦略的とも言える『ソフィスト』の読解があると考える。この反プラトンの読み筋は、皮肉にも後代の新プラトン主義者(プロティノス)の読み方に深い影響を及ぼした¹⁰。他方、Leszl はアリストテレスにおける普遍学の構想を、『ソフィスト』の最大類をめぐる議論の代案として捉え直す。彼はこの視点からN巻の言及を付随的なエピソードに帰す趨勢に反対し、Γ巻やE巻に連なる巨大プロジェクトの一部として再評価した¹¹。また、対話篇とアリス

トテレスの再現の間のずれを再検証した Crubellier は、アリストテレスは原則的に『ソフィスト』の内容を歪めてはいないと言う¹²。とくに、対話篇の議論に応じて ἀντικείμενα と ἐναντία が慎重に書き分けられているという観察は興味深い。少なくともここには、誤解や悪意ある再現などの断定を拒む爪痕が刻まれている。

研究史は成熟の度合いを深めているが、まだ既存の研究が欠いている、ないし軽く触れるだけで済ませている重要な問題がある。それは1) N 巻 1-2 章の文脈は対話篇の引用にどんな役割を要求しているのか、そして2) N 巻 1-2 章の探究がいかなる文脈に置かれているのかの二点である。先行研究はアリストテレスの議論を建設的なものと評価する場合でも、それがなぜ N 巻のこの箇所でなされているのかを説明していない。言い換えれば、ほんらい切り離せない幾つかの解釈上の問い（「はじめに」参照）が、有機的に結びついていないのである。

1については2～4節前半で検討するため、2について本節で確認しておく。まず N 巻の目立った特徴は、先行する探究の続きとして開始される点である。

さて一方で (μὲν οὖν)、この実在についてこれだけのことが語られたとしておこう。他方で (δὲ) すべての人々は、ちょうど自然学的なものにおいてそうであるように、不動の諸実在をめぐっても、原理を相反するものとしている。

(1087a29-31)

文が接続詞 (οὖν) で始まり¹³、相関詞 (μὲν...δέ) によって前の議論と対置されている。かつては直前の M 巻との繋がりを否定する見方も強かったが、現在では MN 巻を一続きの論考と見るのが主流である¹⁴。N 巻は二つの意味で M 巻の探究を引き継いでいる。まず「感覚されるもののほかに不動かつ永遠の実在があるか、あるとすれば何であるか」という大きな問いの枠組み¹⁵、そして「あるものどもの実在と原理が数とイデアであるか」(1076a30-31) という三つ目の検討課題である¹⁶。そのうえで、上記の引用は M 巻と N 巻 (少なくとも導入部) の課題を分節化している。「この実在について」(περὶ τῆς οὐσίας ταύτης) という表現が簡素に過ぎるため、対比の内実には議論の余地があるものの、「アカデメイア派によるイデアと数学的なもの」を指す方向で諸家の解釈はおおむね一致している¹⁷。M 巻では主としてイデアや数のあり方や身分 (実在性) が問われていたのに対して、N 巻ではそれらの原因性 (原理性) に重心が移ってゆく。

N 巻が原理 (ἀρχή) 論を扱うという点で、読者は A 巻や『自然学』第一巻との

共通項を期待しうる。じっさいA巻6-7,9章、また『自然学』第一巻第9章では、N巻と同じくプラトンの「一と不定の二」が議論されており、一部に重なる論点も見られる。だがそれは、ほかの文書と同じ見地にたつ記述がN巻で繰り返されているという意味ではない。やはりN巻は、M巻1章で立てられた問いや狙いのもとに構想され、書き上げられた作品である。それゆえほかの巻や文書の関心によって回収することのできない、独特の筋道と争点があると考えべきである。例えば、N巻における原理論が「感覚されるものとは別の不動かつ永遠の實在」を扱っている時点で、『自然学』の厳密な守備範囲からは外れており、A巻よりかなり限定された問題を掘り下げている。よってアリストテレスのパルメニデス言及を理解するさいにも、N巻独自の文脈を慎重に辿ってゆかねばならない。

2. 厄介ごと (δυσχερῆ) の網の広がり

最初に問題となるのは、プラトニストが不動な諸實在の原理を「相反するもの」(έναντία)として立てていることである。アリストテレスは早くもここに困難を見てとる。相反するもの(白と黒など)は常にそれらとは別の、基にあるもの(ύποκειμένον)に属している。そして基にあるものは、それについて語られるものに先立つ。それゆえ原理がすべてのものに先立つのなら、原理は相反するものとは別の、何かでなくてはならない。

アリストテレスは相反するものについて、「常に基にあるものにしたがってあり、何ら分離されるもの(χωριστόν)ではない。むしろ明らかに何も實在(οὐσία)とは反対でないとも、言論も証言している¹⁸⁾」(1087b1-3)と言う。ここでのχωριστόνとοὐσίαの並置は、M巻との連続性(cf. 1087a23-24)を考えるうえで興味深い。M巻では、プラトニストによって「分離される」とされたイデアや数のあり方が争点となった。だがN巻冒頭でも、諸實在の原理の資格を問う文脈から、實在としてのあり方(分離性)が問われるのである。なぜなら、少なくとも實在の原理であるかぎり、それ自体も實在以上の資格をもたねばならないからである。逆に言えば、彼らは分離されない、つまり實在にもとる原理を、分離される諸實在の原理として立てていることになる。こうした原理の先行性の逆転現象(ねじれ)がどのようにして起きたのかは、後ほど哲学的に解明されることになる。

ここから2章の冒頭に至るまで(1087a31-1088b28)、アカデメイア派の原理にまつわる批判が展開されてゆく。細目は以下のとおりである。

- | | | | |
|-----|------------|---------------------|----------------|
| (a) | 1087a31-b4 | 原理を相反するものとするこの問題 | |
| (b) | 1087b4-12 | その一方を質料とする人々への批判 | ①要素の数的特定 |
| (c) | 1087b12-26 | 〃 | ②要素の中身の特定 |
| (d) | 1087b26-33 | 〃 | ③一との対置の問題 |
| (e) | 1087b33-a2 | 一についての一般的規定 | ①一が尺度であること |
| (f) | 1088a2-8 | 〃 | ②一が不可分であること |
| (g) | 1088a8-14 | 〃 | ③尺度の測られるものへの帰属 |
| (h) | 1088a15-21 | 「不定の二」を語る人々への批判 | ①属性・付帯性の問題 |
| (i) | 1088a21-b4 | 〃 | ②関係的なものの問題 |
| (j) | 1088b4-13 | 〃 | ③述定に関する問題 |
| (k) | 1088b14-28 | 永遠のものが要素から構成されるこの問題 | |

紙幅の都合のため個別の吟味を控え、全体の流れを確認したい。先ほどの問題 (a) に続いて、「相反するもの的一方を質料とする人々」の見解が批判される (b-d)。話題が「一と質料的な原理の対置性」(d) に至ると、一についてのアリストテレス自身の考えが開陳される (e-g)。この内容——とくに「尺度が基にあるものに属すること」——を踏まえて、さらに「不定の二」を立てる人々への批判 (h-j) が展開される。最後に「端的に (*ἀπλως*)、永遠のものが要素から構成されることが可能であるか」(k) という、より一般的な問題が再び提示される。

原理論の範囲という点からして、(a) と (b) 以降の段差はトリッキーである¹⁹。(a) は「相反する」という性格一般を問題にするが、これは二元論全体 (例えば「一と不定の二」) にも、その下位の質料的原理 (例えば大小、多少のような「不定の二」) にも当てはまるからである。だが一部 (d-g) を除いて、主として下位の不定の原理を扱っている²⁰。また、一をめぐる議論 (e-g) も、一の原理とする説の検討というより、「不定の二」批判の準拠を言語的分析に移行させているように思われる。N 巻 2 章に入ると、(k) が再び (a) のような一般的問題を提起する。(b-j) の細かい論点が (a) と (k) の枠に挟まれるように現れるのである。

いずれにせよ、一連の問題のカタログは (k) の包括的視点で締めくくられる。だがその包括性は、検討される原理論の範囲だけでなく、原理の主唱者の範囲をも含意していた。(k) の論点には、以下のような補足が続いている。

なお「不定の二」を一とともに要素と見なしながら、帰結する不可能な事柄のゆえに、適切ながら〈不等〉を厄介なものとする(δυσχεραίνουσιν)、ある人々がいる。だが彼らにとっては、厄介ごと(τὰ δυσχερῆ)のうち以下のこと、すなわち〈不等〉や関係的なものを要素とするがゆえに、語っている人々に必然的に帰結することのみが、取り除かれたに過ぎない。そしてこの見解を離れた厄介ごとは、かの人々にも必然的に帰されるのである——彼らが要素からイデア的な数を作るにせよ、数学的な数を作るにせよ²¹。(1088b28-35)

(b-j)の記述において、アリストテレスはアカデメイア派の学説の多様性と優劣、さらには改良の痕跡すら認めている。じじつ上記の引用で指摘される人々は、(b)や(h-j)の困難を免れているのである。しかし(c-d)では、彼らの改善案も十分ではないことを注意している(1087b17-26, 30-33)。そして上記の引用も、優劣は相対的なものにすぎないと念を押している。アリストテレスの報告に従うかぎり、言及されたすべての学説は(a)と(k)の問題に引っ掛かるはずである。共通の困難という地平において、プラトニストたちのいずれの学説も横に並んでいる。この点から言えば、外枠をなす(a)と(k)、とりわけ(k)は、アカデメイア派の哲学者をまるごと捕縛してしまう投網の、網石のような役割を演じている。

3. 逸脱(ἐκτροπή)の地点——再現されたパルメニデスへの挑戦——

しかしここから先行学説の扱い方は一変する。アカデメイア派が巻き込まれる様々な困難を列挙するのではなく、困難がどこから生じたのか——すなわち一連の困難の淵源に向かって、アリストテレスは深く潜ってゆくのである。

さて、これらの原因へと(彼らが)逸脱した(ἐκτροπή)原因²²は多くあるが、とりわけ古臭い仕方²³アポリアを立てたこと(ἀπορήσαι ἀρχαϊκῶς)が原因である。というのは、彼らには次のように思われたからである。「すべてのあるものども(τὰ ὄντα)は一つ、すなわち「あるもの自体」(αὐτὸ τὸ ὄν)になるだろう——もし(アポリアを)解かず、『あらぬものがあること、それは決して御されることはない²⁴』というパルメニデスの言論に立ち向かわないのだとすれば。そうではなく、あらぬものがあると示すことが必然(ἀνάγκη)なのである」と。なぜならそのようにして、あるもの(τὸ ὄν)とほかの何かから、

あるものども (τὰ ὄντα) が——もしそれらが多であるなら——生じるだろうからである。(1088b35-1089a6)

これまで挙げられた困難の最大の (μάλιστα) 原因は、アリストテレスによれば、「あるものはある、あらぬものはあらぬ」というパルメニデスの命題に由来するアポリアである。このアポリアは、「あらぬものがあらぬ」なら一つの「あるもの自体」しかないが、あるものども (τὰ ὄντα) が多であるなら「あらぬものがある」と示さねばならないという、二者択一の葛藤として再現される。この葛藤に直面して、プラトンはパルメニデスと対決する道を選んだため、(X) あるものとともにあらぬものを原理として、(Y) あるものの多数性を確保したという筋である。

プラトン『ソフィスト』中央部の議論²⁵、とくに 237a (cf. 258b) を指すことはほぼ間違いないが、1節でも触れたように、対話篇と同じ意味で言われているかどうかには疑問の余地がある。上の一節のなかで浮いているのは、下線を引いた「一と多」の対比である。ἐν は αὐτὸ τὸ ὄν の同格語として、πολλά は条件文として補足されているが、いずれもパルメニデスの詩の引用 (237a) にない要素である。プラトンは「一と多」に関する議論を導入しているが (238a-239a, cf. 244c-245c)、多数のあるものの確保という動機からではない。また「異を分取したあるもの」としてのあらぬは確かに無数性を含意するが (257a)、必ずしもこのあらぬものを介して、多数のあるものが導かれるわけでもない。この変更の重要性については次節で改めて論じるが、その前にアリストテレスの立場を見定めておきたい。

上に引用した箇所が興味深いのは、「不定の二」が導入された哲学史的経路——ちょうど A 巻が欠いている説明——が描かれ、しかもアイデアや方法論の継承²⁶としてでなく、アポリアを介した言論の必然的展開として描かれたことである。もちろん同じような強制力は、タレスから説き起こして同時代人のプラトンにいたる A 巻の哲学史でも見られる。だが本箇所は漸進的というより遡及的であり²⁷、問題の根源を照らし出すような機能もっている。アリストテレスはプラトンが引き受けた対決の試みに沿いつつ、二つの論点から困難の所在をあぶり出す。

第一の論点は、(X) ここで言われた「あらぬもの」の特定である。あらぬものが多くの仕方でも語られることを確認したのちに (1089a15-19)、アリストテレスはあらぬものを虚偽 (τὸ ψεῦδος) とするプラトンの立場を批判する。

彼はたとえば²⁸、あらぬもの (τὸ οὐκ ὄν) ——それとあるものから多くのある

ものどもがあるところの——を虚偽 (τὸ ψεῦδος) およびこの本性と語ることを欲している。それゆえに、何らかの虚偽を基に置く (ὑποθέσθαι)²⁹ 必要があるとも語られていた³⁰。ちょうど幾何学者たちも一プースの長さでないものを一プースの長さとして語るように。(1089a20-23)

『ソフィスト』中央部の後半(261c-264b)で証明される、「あらぬものをある」と語る言表(λόγος)としての虚偽を指すと思われる。対話篇においてあらぬものと虚偽は同一視されないが、アリストテレスは虚偽を「あらぬもの」の一種として区分し、プラトンの原理がこれに当たると考えたようである。ほかには「諸々の型に基づくあらぬもの」と「可能態としてのあらぬもの」があり(1089a26-29)³¹、ここでは生成消滅の観点から、「可能態としてあらぬもの」が代案とされている。幾何学者による虚偽については、アリストテレスの学問論でも用いられているが、ソフィストの言論を受けたプラトン(学派)の議論に遡る可能性もある³²。いずれにせよ、あるものとあらぬものという二原理から、多くの(下線を引いた部分)数学的実在(cf. A 6, 987b14-18)が生じるというプラトンの理論が背景にある。アリストテレスは幾何学的な推論の前提に虚偽が含まれるわけではないことを、数学者の実際的な立場から譴責するのである。この論法はM巻にも見られる。

第二の論点は、(Y)多数性の問われ方である。この議論は長大で、N巻2章が終わる直前まで蛇行する³³。とはいえ、アリストテレスの批判点は一貫している。「あるものどもがいかにかに多であるか」という問いを、実在の次元で問いながら、その他の下位カテゴリーの次元では問わないこと、あるいは次元の異なる二つの問いを区別せず、混同していること(1089a34-35, b8-11)である。上の議論と同じく、「あるものども」(τὰ ὄντα)の具体例には数学的なものを念頭に置いている(1089b2-4, 20-24, 32-1090a2)。おそらくこれと関連して、下位カテゴリーとして言及されるのは関係・性質・量だけである³⁴。なお、アリストテレス独自のアポリアも提案されるが(1089b24-32)、積極的に論じられることはない(4節を参照)。

アリストテレスの立場から整理すれば、問題は(X)あらぬものの区分のうち「虚偽としてのあらぬもの」を想定したこと、(Y)「ある」と述定される様々な仕方、とくに実在カテゴリーと下位カテゴリーを区別しなかったことの二点である。あらぬものの語られ方があるものの語られ方に依拠すること(1089a16)を踏まえれば、双方の問題はτὸ ὄν πολλαχῶς(1089a7)というアリストテレスの標語に集約される。その一方で、パルメニデスの命題に抗ってあらぬものがあり、あるもの

が多であることを論証するプラトンの方向性は疑問視されていない。どちらかと言えばアリストテレスも共有しているようである（1089b24-32）³⁵。だとすれば、アカデメイア派の原理論の逸脱（ἐκτροπή³⁶）——誤謬（ἀμαρτία（1088a21）. Cf. 1083b4, 1084b8-15）でなく——は、パルメニデスの強力な一元論の克服という共通の課題と τὸ ὄν λέγεται πολλαχῶς というアリストテレスの視点の間で起こっているに思われる。したがって、あるの多様な語られ方を十分に吟味しないままパルメニデスに挑戦したために、彼らは逸脱を余儀なくされたのである。

4. あるものどもの原理としてのあらぬもの

2節で検討した範囲では、論敵の学説の多様性を考慮して、射程の異なる困難が示された。ある困難は特定の立場を、ある困難はすべての人の学説を覆うものであった。次いで3節でみたように、困難の原因への遡行が試みられた。こちらではほぼプラトンのみを標的として、パルメニデス問題へのアプローチの難点を抉り出した。だがそれは2節の共通の困難とは異なり、直接プラトン以外の人々に帰されるものではない。とくに関係的なものや不等については、免責される人々がいたはずである。では哲学史的な遡行は一体何を明らかにしたのか。

すでに見えているのは、なぜ相反するものや要素が原理に採用されえたのかという点だろう。困難の横の広がりに対する言わば縦の広がり、いきさつを明らかにしうる。例えば、(a) の困難についてアリストテレスが論難したのは、原理はそれが原理であるところのすべてより先であるという原則に、「相反するもの」が反するということである。正鵠を射た指摘ではあるが、当時の人々にとって原理の先行性が自明だったとすれば、なぜ彼らが原理ならぬものを原理として据えたのか、どうして初手から躓かざるを得なかったのかが見えてこない。すぐ思いつくのは、ἐναντία がアリストテレスの図式ではそう整理されるという身も蓋もない説明である。だが「遡行」を通じて、今やわれわれは、彼らを衝き動かしたある種の強制力を理解できる。パルメニデスのテーゼと正面から対峙し、多数のあるものを説明するために、あらぬものをあるものとともに原理としたからである。したがってN巻2章まで読んだ者は、アカデメイア派がたまたま初歩的なミスを犯したのでも、アリストテレスが我田引水な攻撃を加えているわけでもないことを知る。ここには實在にもとる原理を、實在の原理とするようなねじれた原理論の来し方が、古典的な問題の展開として書き込まれているからである。

アリストテレスの立場からすれば、「あるものが多くの仕方¹で語られる」という洞察が明暗を分けるのは間違いない。この独自の視点²を導入することで、論敵の学説のねじれ³を原理的に説明することができる。彼らはあるものの多数性を導出できる原理を求めながら、あらぬものを原理として立てるに至った。その逸脱の決定的な分岐点は、相反するものを考えたことでも、要素を用いたことでもない。ほかならず「多くの仕方⁴で語られるあるもの」を区別しなかった点にある——。しかしながら、このような観察は一連の問題に何ら本質的に答えておらず、N巻独自の争点に迫ることもできていない。というのは、対話篇とアリストテレスによる再現の隔たりではなく、アリストテレスが描出するプラトニストとアリストテレスの隔たりを、彼自身の標語によって埋めているだけだからである。加えて、プラトニストの原理論に *ὄντα πολλαχῶς λεγόμενα* の見方が欠けているという点も、すでにA巻9章(992b18-24)で予示されていた。ゆえに本稿はもう一步踏み込んで、できるだけ前者の隔たりの内実を明らかにし、N巻の書き手を衝き動かした問題意識の核心に近づかねばならない。

最初に問われるべきことは、アリストテレスの再現に不自然な点が見られるとしても、それらを全体として不適切に見せてしまう要因は、結局何なのかである。「あらぬもの」をめぐるパラフレーズの精度の粗さや、批判に用いるという意図は付随的なものとして除外できる。加えてアリストテレス自身の概念と同定する過程も、部分的問題に留まると思われる。むしろ中核的なのは、古代註解者たちがもれなく違和感を書き留めざるを得なかった問題、すなわち「あらぬもの」が一貫して原理として扱われている点であるように思われる³⁷。この扱いは、「あらぬもの」に大局的に期待される役割を分裂させうる。『ソフィスト』ではパルメニデスのテーゼに対して、「あらぬものが(類として)ある」と、また「あるものがあらぬ」(虚偽)と論証される。それはソフィストの像制作術を特定し、ひいては哲学者とソフィストを別の類として措定しようとする、外粹部の文脈が要求した課題である³⁸。これに対してN巻では、不動の实在をめぐるプラトニストたちの原理論の問題を顕わにするという狙いがあった。ゆえに「あらぬもの」の原理性が問われるのは既定路線である。この文脈から『ソフィスト』の一部を参照すること自体が、すべてではないにしても、多くの不自然さや単純化、そして平板化すら招来すると考えられる。

だからといって、アリストテレスは完全に不適切な引用を行ったと言えるほど、事柄は単純ではない。『ソフィスト』の中央部には、Crubellierも指摘するように、

生成の説明や自然哲学者たちの原理をめぐる議論が含まれているからである³⁹。ただしそれらの探究は、基本的に「あらぬもの」ではなく、「あるもの」について遂行されている。この意味で筆者は、直ちにアリストテレスの手続きを擁護できる根拠ではないと考える。だがこうした論点の広がり背景に、パルメニデスの強力な一元論が負荷をかける広範な理論的影響範囲と、これへの抵抗勢力が展開すべき、一続きの地平を透かし見るのは全く自然である。つまりN巻が強調する「パルメニデスへの挑戦」という契機は、先述の対話篇との隔たりを事柄として包摂する。このことは、利用可能な資料（対話篇）には元来制約があるという点と併せて、『ソフィスト』が典拠に選ばれた事情を説明しうらう。

しかしアリストテレスはこのような繋がりをただ読者に汲み取ってもらおうと期待しているのではない。むしろ補足説明によって積極的に介入し、こう読んでほしいという方向性を指示しているように見える。それはN巻2章で繰り返されている「あるものが多くあること」への言及である。3節の二つの引用における下線部の記述は、どちらも挿入的に書き込まれているが、原理論の再現としては不可欠な要件である。じっさい、これこそ「あらぬもの」を原理として採用する、主要な動機だからである。逆に言えば、類としての「あらぬもの」や虚偽の論証自体は、この原理論に至るための通過点でしかない。

『ソフィスト』では「多数のあるもの」の論証にかかわる積極的な動機が語られていないことは、前にも述べた。もっとも、数の付加に関するアポリア（238a-239a）は、真の意味である「一者」以外を排除してしまうパルメニデス的な困難を扱っている⁴⁰。だがこのアポリアはあらぬものと同じくあるものにも適用され、あらぬものに劣らずあるものが厄介であること（246a1-2）を顕わにしてしまう。少なくとも本対話篇にとって「あるものが多くあること」はアポリアの一部ではあっても、パルメニデスに対する挑戦の目標になってはいない。むしろ「一と多」のアポリアは、「あるとあらぬ」のアポリアを解くための鍵となるような洞察をもたらしたと考えるほうが妥当だろう。つまり、プラトンとアリストテレスの間で、パルメニデス問題に由来する二つのアポリアの配置が逆転しているのである。

以上の考察を通じて、対話篇とアリストテレスの再現の隔たり、ないし再現が不適切に見える理由は明確になったと考える。第一にアリストテレスが「あらぬもの」を原理論の文脈においたこと、第二に、これと連動して二種のアポリアの位置づけが入れ替わっていることである。ここで再びアリストテレスの目線に戻ってみたい。不自然さを承知で引用し、苦心して組み直されたアポリアにこそ、

彼が自らの問題として引き受けようとした、真の関心が宿っているのではないか。

N 卷 1-2 章では「多数のあるもの」を導くプラトニストの原理が検討される。この種の原理を導くという目標自体は、3 節で触れたように、アリストテレスも共有していたように思われる。問題はそこに至る道筋である。そもそも「古風な仕方であポリアを立てたこと」が逸脱の主犯であるのなら、ほかのあポリアから出発することで道がひらける可能性がある。例えば 2 章では、問われるべき複数の問いを提案しながら、論敵のアプローチへの疑問が表明されている。とりわけ「いかにして現実態において諸実在は多であり、一つではないのか」(1089b31-32) というあポリアは、下位カテゴリーをめぐる問題 (1089b24-25) と分節化された、実在のみにかかわる問いに仕上げられている。N 卷では敷衍されないとしても、「あるの多様な語られ方」に裏打ちされた「一と多」のあポリアであると言える。あらぬものが系統的に御されることにより、「あるものどもの原理としてのあらぬもの」は、このねじれが解かれるほうへ、「あるものどもの原理としてのあるもの」を打ち立てる構想へ向かうことになると思われる⁴¹。しかしパルメニデス問題の行く末は、アリストテレスの標語のうちにはではなく、プラトンとの対決をくぐり抜けた問いの組まれ方において、巧みに表現されているのである。

結論

N 卷 1-2 章における哲学史的遡行について、本稿は以下の二点を明らかにした。第一にこの探究は、前半で提示された諸困難の起源を特定し、プラトニストたちの逸脱 (ἐκτροπή) を導いた原理的問題を明らかにするものである。第二に、アリストテレスはプラトン『ソフィスト』を引用するさい、パルメニデスに由来する二つのあポリアの関係を逆転させている。それは N 卷の文脈に牽引されたものと思われる。さらに本稿は、「あるものどもの原理としてのあらぬもの」を批判的に分析するにあたって、アリストテレスは「あるの多様な語られ方」を踏まえた、別の見通しをもっていたと推察する。それは単に彼自身の答えがとって代わるといったものではない。複数のあポリアが必然的に展開するその先を見つめ、自らをもその強制力に曝す。そのような仮借なき思考に貫かれている。

まさにこの姿勢を通じて、プラトンとその学派に対するパルメニデスの濃厚な影響が N 卷に記録された。それは A 卷の哲学史を補う以上の、何か独特の空間を形成している。筆者はここに、アイデアを哲学史的に語る事業の光の側面をみる⁴²。

- ¹ M 4 の哲学史と A 6 の記述は重複する要素もあるが、微妙に異なる。拙稿『メタフシカ』M 巻 4-5 章におけるアイデアの再論、『西洋古典学研究』LXVIII, 2020, 38-49 を参照。
- ² 納富『ギリシア哲学史』、筑摩書房, 2021, 447。
- ³ J. Palmer, *Plato's Reception of Parmenides*, Oxford, 1999, 3-16.
- ⁴ N 2 のほか、A 3-5 (984b3, 984b25, 986b18, 22, 27), B 4 (1001a32), Γ 5 (1009b21) に見られる。B 4 の第 11 アポリアは、A 巻と同様プラトンとピュタゴラス派を対で扱っているが (1001a9-11)、内容面で N 2 の議論を先取りしている。Cf. W. Leszl, "Alcune osservazioni sulla critica aristotelica ai platonici in *Metafisica* N 2," *Rivista di Filologia e di Istruzione Classica*, 101, 1973, 70-87, esp. 81-82.
- ⁵ 「ああ何ともきみは善き人でありながら、おこがましく語ったことか。それもしプラトンがとりわけ『ソフィスト』における諸仮定を追いながら、素朴にも行き詰まったのだとしたらだが。」Syrianus, *In Met.* 170. 27-28 (ed. Kroll). 傍点部の韻律はヘクサメトロスである。Cf. J. Dillon/D. O'Meara, *Syrianus: On Aristotle Metaphysics 13-14*, London, 2006, 208, n. 425.
- ⁶ D. Ross, *Aristotle's Metaphysics II*, 1924, 476. J. Annas, *Aristotle's Metaphysics Books M and N*, Oxford, 1976, 205-207. H. Cherniss, *Aristotle's Criticism of Plato and the Academy*, vol. 1, Baltimore, 1944, 92-102. P. Aubenque, *Le problème de l'être chez Aristote* (2^{ème} éd.), Paris, 1966, 144-159. I. Mueller, "Aristotle's Approach to the Problem of Principles in *Metaphysics* M and N," in A. Graeser (ed.), *Mathematik und Metaphysik bei Aristoteles*, Bern-Stuttgart, 1987, 241-259.
- ⁷ J. Owens, *The Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics* (3rd ed.), Toronto, 1978, 437, n. 22. J. Cleary, *Aristotle and Mathematics*, Leiden, 1995, 386. T. Clarke, *Aristotle and the Eleatic One*, Oxford, 2019, 149, n.10.
- ⁸ A. Schwegler, *Die Metaphysik des Aristoteles IV*, Tübingen, 1848, 346. H. Bonitz, *Aristotelis Metaphysica II*, Bonn, 1849, 575. Ross, *op. cit.* II, 475. Leszl art. cit., 1973, 70-87. Annas *op. cit.*, 201, 205. M. Crubellier, "Les livres Mu et Nu de la *Métaphysique* d'Aristote: Traduction et commentaire," Diss. Université de Lille III, 1994, 439, 441. H. Zekl, *Aristoteles Metaphysik*, Würzburg, 2003, 566, n. 15. W. Leszl, "On the Sciences of Being *QUA* Being and its Platonic Background," in A. Stevens (ed.), *Aristote Métaphysique Gamma: Édition, Traduction, Études*, Louvain-le-Neuve, 2008, 217-265.
- ⁹ 幾つかの対話篇 (『ティマイオス』、『パルメニデス』、『ピレボス』) が候補として挙げられる。プラトンの「あらぬもの」や「不定の二」は対話篇をまたいで再構成されていると思われる。
- ¹⁰ M. Narcy, "La lecture aristotélicienne du *Sophiste* et ses effets," in P. Aubenque/ M. Narcy (eds.), *Études sur le Sophiste de Platon*, Napoli, 1991, 417-448. 新プラトン主義者による本対話篇の読み方については、納富『ソフィストと哲学者の間』、名古屋大学出版会、2002、6-7, 13-21 を参照。
- ¹¹ Leszl art. cit., 2008.
- ¹² M. Crubellier, "Aristotle Reads the *Sophist*: *Metaphysics* N 2, 1088b35-1090a2," A revised version of a paper given at the Workshop *Aristotle's Ontology in the Framework of Plato's Academy* (Università degli di Torino, May 29th, 2019), 1-14.
- ¹³ 冒頭に接続詞をもつ巻は『メタフシカ』に四例 (HOMN) あり、これらの巻は完全に独立しておらず、何らかの形で先行の内容を受けると見なされる (Cf. Ross I xiii-xv)。
- ¹⁴ 19 世紀以降 MN 巻が切り離して読まれてきた経緯は、E. Berti, "Les livres M et N dans la genèse et la transmission de la *Métaphysique*," in A. Graeser (ed.), *op. cit.*, 1987, 11-31 に詳しい。
- ¹⁵ 1076a10-12. しかし Ross (II 470) はこの課題が N 巻の主題と対比されているように解する。
- ¹⁶ 本稿では、N 巻は M 6-9 とともに第三プログラムを引き受けていると考える。プログラムの区別と割り当てについては、『新プラトン主義研究』第 21 号に掲載予定の拙稿「古代後期における『メタフシカ』MN 巻の構成理解——争点の仮説的復元——」で整理した。
- ¹⁷ Ross, Annas, Crubellier. ただシエフェソスのミカエルは A 巻で探究された実在を考えているようである。この問題の背後には MN 巻の資料上・内容上の段差と繋がりを説明しようとする込み入った研究史がある。両巻の接続問題については、別稿で改めて論じる。
- ¹⁸ λόγος (1087b3) の内容について、Ross は *Cat.* 3b24-27, Annas は *Phys.* 189a32-33, Crubellier は

- Int.* 16a29-32 を挙げている。Crubellier の説をとる場合、「言語」(le langage) と訳すべきだろう。
- ¹⁹ 1087b4 の δέ は順接としても訳せるが、内容的に逆接として理解できる。アリストテレスにとって、質料は ἐναντία の一方を構成しないという事情が考えられる (Cf. *Λ* 10 1075a28-34)。
- ²⁰ 一に関する学説はむしろ *N* 4-5 で本格的に検討される。「不定の二」への傾斜は、2章の批判と関連が深い。そこでは「あるもの」より「あらぬもの」としての原理が問題化される。
- ²¹ 末尾の譲歩文は、スペウシッポスの見解(すでにイデアを斥け、数学的な数を立てていた)を漏らしていないことを強調したものと思われる。
- ²² P. Merlan, “TO ΑΠΟΡΗΣΑΙ ΑΡΧΑΙΚΩΣ (Arist. *Met.* *N* 2, 1089a1),” *Philologus* 111, 1967, 119-121 は αἴτια (1088b35) と αἰτίας (1089a1) の言葉遊び (Wortspiel) を指摘する。
- ²³ ἀρχαϊκῶς の用例は *Corpus Aristotelicum* で本箇所のみであり、アンティオコスとオイノピデスの断片を除いて初出 (TLG を使用)。「古風に」(ἀρχαίως) とは違い、単に古いというより、pejorative な含意があると思われる (cf. アリストファネス『雲』821)。Merlan art. cit. はプラトニストの二元論に対するアリストテレスの質料論という対比を想定しているが、やや飛躍がある。
- ²⁴ τοῦτο δαμῆ EJ Simpl. Ross, Jaeger.: τοῦτ' οὐδαμῆ A^b Lat^e Syr^l *Soph.* βTW(237a, 258d): τοῦτο μηδαμῆ Ps. Alex.: τοῦτο δαῆς Bekker, Schwegler, Bonitz, Christ. Ross と Jaeger に従い E, J 写本の読みを採る。
- ²⁵ Ross *op. cit.*, II 475, Annas *op. cit.*, 201, Crubellier art. cit., 1994, 439. 『ソフィスト』篇の中央部と外枠部の区別については、納富 *op. cit.*, 2002, 28-31 を参照。
- ²⁶ A6 における ἀποδεξιόμενος や τοῦνομα μετέβαλεν という表現はこちらに属すると思われる。『自然学』19 でもパルメニデスの考えに同意して (ὁμολογοῦσιν)、プラトンが「不定の二」を立てたことが記されているが、アポリアへの応答という形では語られてはいない。
- ²⁷ Crubellier (art. cit., 2019, 2) はアポリアの prospective な使用として B 巻と『自然学』I 巻、retrospective な使用として *N* 巻と *Λ* 10 を挙げている。
- ²⁸ Crubellier art. cit., 1994, 448 “δὴ est apparemment ironique.” Cf. Denniston 233.
- ²⁹ Crubeiller art. cit., 1994, 449.
- ³⁰ Cherniss *op. cit.*, 98, Leszl art. cit., 2008, 234.
- ³¹ Cf. *Θ* 10, 1051a-b2, *Λ* 2 1069b27-28. 「型」(πῶσαις) の意味は直後で言い換えられるように κατηγορίαί に対応する (cf. Ross II 476)。アリストテレスの μὴ ὄν 概念の一貫性と独自性については、E. Berti, “Quelques remarques sur la conception aristotélicienne du non-être,” *Revue de Philosophie Ancienne*, 1, 2, 1983, 115-142 が優れている。
- ³² Cf. *APr.* I 41, 49b35-36, *APo.* I 10, 76b39-77a3, *Met.* B 2, 998a1-4, M 3, 1078a19-20.
- ³³ *N* 2 末尾 (1090a2-15) は「数の実在に関する信念」という別の論点を導入し、実質的に *N* 3 の内容を準備している。Cf. M. Crubellier, “L’unité, l’ordre et le but du livre *N* de la *Métaphysique*,” A paper given at a conference held in Paris, Centre Léon-Robin, le 25 mars 2016, 1-12, esp. 7.
- ³⁴ 関係的なものは 1089b8-15、性質は 1089b15-24、量は 1089b32-1090a4 で順次触れられる。
- ³⁵ ただし『自然学』I 巻でも詳論されるように、第一哲学に限定されてはいない。
- ³⁶ Cf. 1089b4 “παρέκβασις,” なお *Phys.* I 8 191a26, 191b32 に出る “ἐξεπάτησαν” は、変化の説明においてすでにパルメニデス自身が逸脱していたことを示唆しており、興味深い。
- ³⁷ Syrianus, *In Met.* 170. 28-31 (ed. Kroll) および Ps. Alex. *In Met.* 806, 26-30 (ed. Hayduck). Cf. G. Movia (ed.), *Alessandro di Afrodisia e Pseudo Alessandro: Commentario alla “Metafisica” di Aristotele*, Milano, 2007, 2360, n.98.
- ³⁸ Cf. 納富 *op. cit.*, 2002, 11-12, 207-208.
- ³⁹ Crubellier art. cit. 2019, 3-4.
- ⁴⁰ エレアの客人によって「アポリアのうち最大かつ第一のものであり、この言論の出発点(ἀρχή) そのものをめぐるものになっている」(238a2-3) と語られる。
- ⁴¹ *MN* 巻の批判的議論に対応する、*Λ* 巻(とくに 10 章)の議論が候補になると思われる。
- ⁴² 本稿は JSPS 科研費 JP21J10526 による成果の一部である。原稿には納富信留先生、今井知正先生、杉本英太氏、青木健一郎氏より有益なコメントをいただいた。この場を借りて感謝する。